



発行所 公民館 西蒲原郡 北川郡 北洋印刷株式会社 (西蒲原町、電話204番)

みたままの記 卷中學校を訪ねて

子供たちが珍しそりに、みんなこちらを見る。その顔がどれも私には親しみのある顔ばかりだ。はにかみながら頭を下げる子、くすりと横目でピョコンと頭を下げ逃げるように走り去る子、どれもこれも図書室での顔みしりである。来意を告げて教員室の火鉢のまわりを腰を下す。

言指導などについての話を下さつたが特に感じさせられた事は生徒のクラブ活動、生徒会に於て自主的に計画、活動をやらせている事であり、又これを適當に教師が助言指導していることである。例えは巻校の生徒は他の学校の生徒に比較して体が弱い。よく他校との体育大会を見て一寸した旅行とか朝の訓話の時間等ですぐ気分が悪くなつて倒れる生徒が多い。

これはどうしたのだらうか、何故巻校の生徒は体が弱いのかこれには先ず手近な問題としてどうすればよいのかとどういつた事が先生を交えた生徒会に提出された。それ以来生徒は朝登校と同時に誰れ彼れとなく雨の日以外は廊下の窓がきちんと開かれるようになり、又お昼休みには自分の体に應じた体操を全員で屋外の運動場に出てやるようになった。今日は雨のためそれをお見せできないのが残念です。この体操も各学級毎にAの組、Bの組と大体同じような体力により組分けがなされている。

又校内の清掃など実によくまわっている。郡内の校長会とか協議会などよく巻にありませうが、この様な時こんな言葉が聞かされる。『今日日達の会合があるのだから特別に綺麗に清掃した』かの如く申されるが決してそうではなく生徒全体が何事にも責任を持つてやる、こういう気運が清掃の面とか窓の開閉などもうまよく行われるのであつてこれにも各部の役員を出来るだけ大勢にして

時々改選する。そうすることによりお互が役員の時苦勞も知つているので、自からもこれに協力するようになつて来た。語る先生の顔は子供に對する愛情に満ちてゐる。『會議が始まるから』と係の先生の連絡がある。週番引繼の會場にあつた。雨の故か一寸薄暗い、生徒の視線が一勢に私の方に向く。世界の發明年代表が正面にはられ、その下に学校の教育目標であらう『計画を立て、自から進んで学習しよう』と書かれてある。中央の議長席に面して三列にならんだ机に今の週番と来週からの週番が各々位置して、盛んにこの一週間の今週の週番が週番としての仕事を果して来たかどうか各学級毎に議長の指令により『注意事項はどうでしたか』『努力点についてどうでした』と次々との一週間の出来事がたぐり出されて行く。『いろいろ注意したので男の生徒は女のいう事を聞かない』『随分注意するんですけれど廊下を走る人、右側通行を守らない人がいる』中には顔を赤らめ

乍ら報告を終りほつとしたような顔の人、又中には吃る人もいてそのたが事にあら、こちらに笑聲が起る。私はあの『山びこ学校』を連想しながら今日この會を見学したのであるが、あのような素朴さ、あのような元氣さはないが一つ一つの發言の内容を見究めながら順序よく話しをうまうまとして発表するあた

り、少年らしいと言ふよりはむしろ大人びた感じがする。又一つの問題が提出される。いろいろな角度からそれを検討して、それが時々行詰ると先生がこれに助言し、會の方向を示しておられた。このような訓練を得た人となつて活躍する時この町にも何か大きな期待がもてるよくな気がする。(北川)

基礎排水路について 全町の基礎排水路について検討を加へ早急改善を要するヶ所について來春施行することに決定した。公営住宅通路の架橋について 赤サビ橋の古材を利用架橋する事を承認。中江筒の改修について 検討した。公営住宅の建設について 九月二十四日 第四回臨時會 出席二十二名 欠席四名 左の議案について慎重審議の上原案の通り議決した。公営住宅の建設について 九月二十五日 土木厚生合同委員會 出席十四名 欠席二名 昭和二十七年年度巻町歳入歳出第五回追加更正予算について 九月二十五日 土木厚生合同委員會 出席十四名 欠席二名 公営住宅建設について 設計位置等について検討早急入札に附することを決定した。敷地現場に於て調査を行った。

次の日 十一月三日 (文化の日)

卷町議會だより

九月八日 全体協議會 出席二十一名 欠席五名
①教育委員会の設置について
教育廳西蒲原出張所 榊沢氏より説明を聴き單獨設置か一部事務組合設置かについて検討した
②第五分區(赤サビ)ガソリンポンプ購入について
消防委員会委員長報告により慎重検討新購購入することを承認購入について細部の研究は消防委員會に附託する事とした
九月十二日 消防水道委員會
①ガソリンポンプ購入について
各製作所のポンプに
九月十七日 全体協議會
急発註することを承認した
九月二十四日 出席二十四名 欠席二名
左の議題について慎重検討した
①固定資産の評価について
②第五回追加更正予算について
③庶民住宅の建設について
④町議會定例会の回数の変更について
⑤県道(本町通り)の舗装について
⑥消防ポンプ(第五分區)の購入について
九月二十二日 土木委員會
出席八名 欠席なし

公明選挙、理想と叫ばれただけに今度こそはスツキリしたもの期待した声がきかずにどうやら終了した事はまずまずホツトさせる。然しこの選挙で混乱した一ヶ月を反省する時、批判力のない女達をリドしてきた男の世界に不思議と割切れない妥協や情実やなれあいやが伏在してないか、か、そしてまたこのあいまいな氣持が町の數委選にも常識をはづれた政争となり、權力が支配したり感情にこだわつたりした跡の見えるのは淋しいことだ。政治はむづかしいからあなたまかせだとは昔ばなしにしたい。井戸端會議に『米の値が高くてやりきれない』『大雨が降ると道が水びたしで困る』『廿五万円もする機関銃一丁作るのに、庶民住宅を建ててもらいたいものだ』等聞く。これほど身近な政治問題にぶつかつては現在、井戸端會議に終らせず、ついで自分達の手で選んだ政治家なのだ。政治は生活にあることを自覚しよう。



学 校

ぎ ら い

四年 沢 栗 辨 次 郎

前の勤務中でのできごとであった。これは一年生であったが、先生に叱られるといつて学校へくるのをいやがつた子供が、そこでその原因を色々調べたところ、それは自分のした失敗が先生にわかつてしまつたので、先生に会えば叱られるに違いないという予想をもつて学校へ来るのがいやだつたのである。その上更にその子供の心理状態に大きく影響しておつたと思われたのは、その子の母親の不必要な甘さが微妙な作用を与えていたと見てとつた。

その子は、学校へ行かないといながら、学校のグラウンドのところへきては、自分の教室をながめ、休みの時間、友達が外へ出てくると、そこで遊んでいたのである。これが子供の自然ではないだろつかと思出された。学校へいかなないというの、子どもの本心ではなくして、なにかしら母親へのあてつけのいがかりであるような

ことが多い。だから、これを真にうけて、学校へ行かなくてはこれが大変と、やれどこのうのと大騒ぎを演じると、子供の思つぽいにおちこんでしまうのである。

私は子供といふものは、どんな子供でも、真底から学校へ行きたいがらないものはないのだと思つてゐる。それは人間の本性である社会的欲求といふ点からいつても、そうである。人間はだれでも『人なみでありたい』と欲求をもつてゐるので、同じ年頃の子供たちがみんな学校へ行きたいといえ、どんな子供だつて、ランドセルをねだつて学校へ行きたくなるのはあたりまえである。これは又学校へ行かない小さい子供達の間にも『学校、ごっこ』という遊びの生活がくり返されることからいつても、学校へ行きたいという魅力は相当強いもののように思える。

そこで、問題は学校を休むとどんなこと

になるかという事である。本心では学校へ行きたいと思つてゐるのに、それが行きたくない、行けないといふことになると、そこに問題があると思ふ。

家庭に對する腹いせのために学校へ行つたふりをして学校を休む、これが第一の理由である。

第二は、学校自体に面白くないものがある。教師がわるい、友達がいじめる。

第三は子供自体の能力が及ばない。勿論これは学校での学習形態にも関係したことがらであるが、はじめは純な氣持で学校を休んだものが、つもり重なる学習癖を形成してしまふ。

これはおそろしいことである。こうなると、学校を休むことを何んとも思わなくなつてしまふ。つまり学校放棄の觀念ができてあがつてしまふのである。これが青少年の不良化につながる

ていくのである。青少年の不良化といふけれど、不良化するにせよ、たやすく一朝にして不良化するものではない。つまり重つて自然と類は類を呼んで徒黨をつつたり、親分を持つたりするようになる。だから学校を休むといふ觀念をもたせることは、よくないことである。義務を放棄することだといふふうには、幼少のうちからしつけが必要があると思ふ。

病氣は早いうちにその原因を発見して、治療すれば容易になるものである。捨

ておけばおほくほど病膏盲に入つてしまふのである。そうなら、なかなかおほくしにくくなる。

子供の問題は、学校忌避といつたようなことだけである。すべてそれが大きなものになつて成長しないうちに、それをつきつめて考へてみる必要がある。そして悪い芽はそれが育つ前に摘みとつてしまふように、一つづつ解決していくのが大切である。そして不斷に子供を誤らしめないように、氣を配つてやらなければならぬと思ふ。

天神山城址見学記

天神山城主小国氏といへば、風雲急を告げる南北朝動亂期に、越路の平野に勤皇軍としてその名を知られた宮方の總帥である。

卷町史學會主催のもとに一行約二十名、このつわもの榮枯の夢を秘めた城址を訪れたのは、秋空高く澄みわたつた九月二十一日であつた。

松嵩山麓のみ社にぬかづき、左に道をたどれば、右にはそそりたつ松嵩山を仰ぎ、左には道に添うて清らかな小流が流れる。薄を分

ことに老松が多い。この平坦な林間の地には石碑が立ち、『天神山城址』と大書されてある。老松にかこまれたこの平坦地こそ天神山城本丸の址である。ながむるに、たまたむにたざありし日にこの山頂に花に酔い、月を愛で、高吟してやまなかつたもののふの昔を思ふのみ。いつかはものふも耳を傾けたであろう松風の音には、昔日の秋の静けさがなお漂うていた。

本丸からの展望は北側にのみひらけたといへ、誰しも眼を奪われるであらう。足下に深い谷をへだてて松嵩城址がそびえ、さらにかなたに蒲原平野と越路の海を望む。西、南の方、尾根は多寶山へとつらなり、肩にせまる本丸より東の低地には深き樹木におおわれて静寂をたたえたひょうたん池があり、庭園の一部であつたであろうことをしのばせる。南隅に石がたゞまれ、清水の源として現存する樹間をもれる陽光のみが、かすかに水面を訪れるのみ。池より、さらに東方へ續く急坂を攀じれば断崖に立つ。これこそ故人が、ありし日に同じ様に立ちならんだであらう石壘である。若むした自然石にもまごう巨大な岩石を見る時、これを積みあげたつわものたぐいましさが身に、心にせまる。石壘を東端として眼下の展望は、越路の平野は一望のうちに自らおさまる。

城址一巡を終つて秋の日の背にまわるころ東側石壘の北端より下山の途につく。

四百年の興亡を語り歴史的面目躍如たるこの雄渾な城址こそ、わが郷土の誇りとすべきものでないだらうか最後に、當日、つねに先頭にあつて御案内下さつた岩室公民館長渡辺寛三郎氏に、参加者の一人として有意義な一日を過ごさせていだいたことに對して厚き感謝の意を表する次第です。 M・K

- 今年の優良あかちゃん
- 一区 長谷川幸吉方 清ちやん
 - 二区 本間豊助方 正志ちやん
 - 四区 佐久間初太郎方 典子ちやん
 - 五区 八木次郎方 勉ちやん
 - 六区 大浦作二方 安二ちやん
 - 七区 永野哲道方 成美ちやん
 - 竹平正司方
- 【家庭重宝メモ】
- 一、芥子のかき
 - お茶汁でときうつわを温め伏せると、くせのない、よくきいた練芥子となる。
 - 二、沢庵漬の塩の割合
 - 甘漬：浅干大根(弓形に曲げる位)十七貫、食塩二升、三升、米糠七升、九升位
 - 中甘漬：中干大根(半山形に曲げる位)十七貫、食塩四升、米糠六升、八升位
 - 辛漬：上干大根(円形を作れるもの)十七貫、食塩五升、米糠五升、七升位、以上は四斗樽一本の割合、尚サツカリンは三瓦、たくわん漬の素は一箱、最初によく混ぜ合せて上手に漬け込む事。赤なばんを所々に入れると虫が出ぬ。押石は十六メ、二十メおし蓋は底と同等のもので、いつも塩水がおし蓋の上にある事が味を落さぬコツ